



笑顔とやる気いっぱいの中 生徒自らが常に鍛え続ける中

# 七中だより



第 7 号 中野区立第七中学校《学校だより》

平成 30 年 11 月 28 日

URL <http://homepage3.nifty.com/nk-7-j/>

TEL 03-3389-4171

## 見えないけれど見える

7月の19日から始まった体育館の工事も4か月を過ぎ、ようやく完成に近づいてきた。校庭に立てられ現場とグラウンドの境を示していたフェンスも外された。体育館の中にはまだバスケットゴールは吊り下げられていないが、鏡のように光る床が貼られている。真夏のシーズンから木枯らしの季節まで、体育館の無いことでいろいろと不便があった。体育の授業、朝礼、集会、部活動。合唱コンクールのリハーサルは校庭だった。その間、部活動で助けていただいたのは、江古田小学校である。バスケットボール部とバレーボール部がかなり自由に使わせていただいた。とても有り難かった。もうすぐリニューアルする体育館、使い方のルールや、新しく作られたトイレの使い方など少し打ち合わせするところもあるが、七中生はきっと大事に使ってくれるだろう。普通にあったはずの体育館がなくなったことで、普通のありがたさを感じたはずである。

この体育館のない間は、確かに不便なことも多いし制約されたことも沢山あったが良いこともあった。特に私が感じている「天の声、天の拍手」について思う所がある。それは、放送による朝礼時の挨拶である。生徒会の役員が放送室でかける「起立」と同時に起こる椅子の音、私の「おはようございます」の挨拶に続き、校舎全体から降りてくる「天の声、おはようございます。」これは、本当によい気持ちだった。体育館に整列して顔を見ながら声をかける、それと同じような感覚があった。きっと、生徒の一人ひとりが放送

校長 池田 俊一

室に届け！！とばかりに体育館での挨拶にもまして声を張ってくれたのだろう。また、表彰の場面では、教室で起立している本人に向けて賞状を読み上げ「おめでとう」の言葉を添える。それと同時に下りてくる拍手の音と「おめでとう」と言う友の声。とてもとてもいい気持ちになってしまう。放送室と各教室の間には、沢山の壁や階段があり阻むものは多い、しかし、教室にいる一人ひとりの顔は実際には見えないけれど、照れている顔、すましている顔、突っ込む友達の姿などがありありと見えていた。目に見えないけれどつながっているそんな「気」があった。これはきっと大切なものだ。見えないけれど確かなもの、それが心ということだろう。何よりも大事にしたいものだ。この大切なものを大切にしていけば結果は必ずついてくる。

私が話しをする放送室からの朝礼は、もうありません。完成した体育館に戻ります。教室の生徒たちのお蔭で、この5か月間は本当に良い気持ちでした。



光る体育館の床 11/26 撮影

生徒会役員が交代しました 生徒会役員を二期務めた前生徒会長の感想です。

## 生徒会役員を終えて

3年B組

生徒会役員会は、その年の目標を一年で達成することがほぼ不可能な仕事だと思いました。個々の委員会、役員会の活動は、それぞれ独特の大変さがあり、実際に仕事をしてみないと分からない苦労がありました。生徒会活動にあたって、一つの壁であったのが役員個人の予定です。放課後の活動がほとんどだったため、部活動に参加できる時間が減ってしまったり、家の用事があったりと、役員全員で話し合い、決定することが難しいです。私は役員をまとめ、指示する立場でもあったため、部活動に遅れたり、参加できない役員に申し訳ない気持ちが強かったです。「両立」という言葉がよく使われますが、そう簡単にはいきませんでした。どちらも懸命に取り組もうとして、どちらも不十分になってしまうケースが多いと思います。だからこそ、役員一人ひとりが責任をもってより早く仕事をしなければなりません。誰か一人が期間までに仕事ができないと、その後活動の悪循環が続いてしまいます。だからこれからの生徒会役員にも、責任を持って仕事をしてほしいと思います。

また、役員会を通して、これまでの役員を担ってきた先輩方の意志も大切にしていけることが、目標の達成につながると思いました。文頭でも言った通り、一年間という短い時間で新しい役員が、新しい目標を立てていては達成することから遠くなってしまいます。歴代の先輩方が残してきたことを、その年その年にあった形で解決していく事が大事だと思います。私は二年間、役員会で仕事をさせていただきましたが、それでも達成できていない事があります。意見を集め、それについて話し合い、提案するだけで一年かかった事実もあります。新しい役員のみなさんには、まず、生徒会役員の仕事を十分に理解した上で活動してほしいと感じました。

そして最後に、私が生徒会活動をする上で大切だと思ったことは、目に見える結果として功績を残すことよりも、より良い環境にするための努力をつくることです。自分達にできることを少しでも取り組み、たくさんの人の想いや努力が積み重なり結果がやっとなってきまします。それぞれの代で違ったやり方があると思いますが、これからの役員が責任をもって仕事に取り組んでくれることを期待しています。

生徒会役員会を通して様々な事を学びました。中学校生活のいい思い出にもなりました。協力してくださった生徒、先生方、地域のみなさんありがとうございました。これからも、七中生徒会役員にご協力お願いします。

※ 学校生活に関わる様々なことについて考え、気づき、協議しながら、全生徒が、より良い学校生活が送れるよう活動してくれました。生徒会活動は教育課程上では特別活動という領域になるのですが、特別活動は「為すことによって学ぶ活動」と言われています。全生徒会役員の皆さんは、考え、行動するという学びを实践したことになると思います。役員としての実践はよい学びになったと思います。お疲れ様でした。

さて、役員会には所属しなかったけれど、地道な活動をしていた皆さんもよい経験となり、よい学びになったと思います。よく頑張りましたね。

## 中野区読書感想文コンクールが行われました 2名が入選しました。

### 今の自分と繋がる過去

3年A組

「自分の生活しているこの社会の座標」がわかりますか？と聞かれたら、今あなたは答えることができるだろうか。この言葉「自分の生活しているこの社会の座標」とは第一章に載っている言葉だ。この言葉が印象に残り、この本を読むことにした。はじめのうち、私はその言葉の意味が分からなかったが読み進めていくうちに明らかになっていき筆者がいう座標というものが少しずつ自分で理解できるようになった。筆者は「自分が生活しているこの社会の座標」はなぜ歴史を学ぶのかという答えに繋がっていると考えている。文章中に今起きている我が身の幸、不幸は過去の過ちから繋がっているものであり、決して一人で作り出したものではない。幸福を享受する人間は、その幸福には誰かが作り上げた歴史があって、自分のところにもたらされたということを必ず知らなければならないと書かれていた。この文章を読み私は深く共感した。今、私たちは戦うことなく平和に家族や友達と一緒に過ごしているが、その幸せは今まで生きてきたいろいろな人たちの努力のおかげだと感じた。例えば、終戦後の焼け野原の東京のために汗を流し、働いてくれた人たちがいるからこそ、こうして私がこの場所に住み、生活することができている。私はこのような「今」が座標であり、その座標はそれを表すための過去からの繋がりがないとわからないのではないかと思った。私が住む東京は、終戦からわずか約十九年という短い期間で目覚ましい発展を遂げることもできた。その人達を知り、考え、感謝し、もう一度今の自分がいる場所を確認することがこれからもその当たり前のような幸せを続けるためにできることだと思う。また、今回は作者の戦争に対する考えを知ることができた。その中でも私が特に大切だと思った二つのことについて書こうと思う。まず、筆者は戦後、実際にレイテ島に行ったと書いてあった。そこで裁縫兵が使っていたと思われる錆びたミシンを見て、当時の亡くなっていった兵士を想像し、「彼らはそもそも軍人ではない。魚屋であり、郵便局員であり、市電の運転手であり、今の私たちと同じ学生だった。それが真実だ。」と書いていた。筆者のこの言葉が心にすごく染み込んだ。なぜなら、過去からいくら目を背けたところで何も変わらない、それが真実なのだから。と読者に訴えてくるような言葉であったからだ。また、過去の出来事を後世に伝えていくことが私の重要な役目であると考えている筆者の思いがひしひしと伝わってくるものだった。太平洋戦争では、学徒出陣で学生まで戦争に兵として参加した。また、勤労動員や学童疎開など今の私たちと同じくらいの年齢の子供やそれよりももっと小さい子まで戦争の影響を受けることになった。本来なら、今の私たちと同じように学校へ通い、友達と話し、勉強をしているはずだったのだ。しかし戦争はそれを阻み、また多くの命を奪った。それは事実である。だから忘れないでほしい。このような思いで筆者は書いたのではないかと考えた。次に私が筆者の立場だったら、文中にも書かれているようにこのような戦争の話を体験していない自分が書いていいのか、などとためらうことがあると思う。それでもしっかりと本に残し、その体験や思いを伝えていっている筆者はすごいと思った。自分の母や父が体験した過去を自分は体験していないわけだが、そこには計り知れない苦労があっただろうなと思った。またそれを易々と語ってはいけないのではないかとも思う。筆者は自分の母が戦争の体験を自分に話してくれたとき、ただ暗い話だけではなくてそれ以外の小さな幸せも話してくれた。

と書いてあった。私はこの文を読み、過去の体験を知る上で、悲惨さや悲しみだけを知ることが全てではないと思った。最後に、この本を通して私はこれから、もっと戦争以外の歴史だったり、他の世界の歴史も知っていきたいと思った。この本を読み始めた頃は、歴史に関していまの自分に関連する重要なことであるとはあまり思っていなかった。けれども、この本を読み終わった時、その考えはガラリと変わった。私も筆者のように後世へ過去の出来事を風化させずに伝えていくことができたらいいなと思う。怖いことではあるけれど、このような過去を作り出したのは人間である。これからの未来をつくることができるのも人間である。だからまた、何が起こるか分からない。二度とこのような過ちを犯さないようにするためには、それを忘れてはならないということだ。もう昔のことになるから自分にはあまり関係のないことだ、などと思わないように意識していく事が大切であると改めて思った。

※ 書名 日本の「運命」について語ろう（出版社 幻冬舎） 著者 浅田 次郎

### 道徳授業地区公開講座・平和の語り部事業（講演）・学校公開

12月8日（土）に学校公開を実施します。今回は中野区「平和の語り部」事業の講演も合わせて実施します。多くのみなさまのご参加をお願いします。

- 1校時 平和の語り部講演会 （第一学年：体育館）
- 2校時 道徳授業 （全学級）
- 3校時 道徳授業地区公開講座協議会（被服室）

#### 平和の語り部事業 講師の紹介

語り部の木村徳子さんは当時10歳。爆心地から約3.6キロの長崎市新地町で被爆しました。元気だった友達や身近な人の突然の死に、次は自分の番かもしれないという不安な思いで10代を過ごしました。核兵器の削減では意味はない、核は一発もあってはならないと訴えます。原爆が投下された当時の様子についてお話していただきます。

### 第七中学校体育館改修記念 柿落とし講演

オリンピック・パラリンピックアワード校事業

先輩（七中卒業生）アスリートに学ぶ

日にち 平成30年12月20日（木）

時間 14時10分～

場所 体育館

講師 伊藤 隆太 氏 ボブスレー日本代表 （伊藤選手HPから転載）

※第七中学校の卒業生で学区域にお住いの伊藤氏にお話を伺います。地域公開型の講演会です。多くの皆様の参加をお願いします。順次「車椅子バスケットボール体験会（生徒が体験をします）」、「多様性について学ぶ（LGBTs、SOGI）」など地域公開型の講座を計画しています。改めてご案内します。



### 東京中野ライオンズクラブ第55期様から寄贈いただきました

ポータブルアンプスピーカーとワイヤレスマイクの寄贈を頂きました。ご報告しますとともに感謝申し上げます。大切に使用させていただきます。

